



大阪公立大学出版会

No.45

NEWSLETTER

ニュースレター

Osaka Metropolitan University Press (OMUP)

目次

• 新年のごあいさつ	八木 孝司 … 1	• 受賞作品	4
• 自著を語る (40)「教育の〈不可能性〉と向き合う」	森岡 次郎 … 2	• 新刊書の紹介	4
• 自著を語る (41)「福祉環境デザイン原論」	森 一彦 … 2	• 編集後記	4
• 自著を語る (42)「都市経営からまちづくりを考える」	佐藤 道彦 … 3		

新年のごあいさつ

大阪公立大学出版会理事長 八木 孝司



皆様には、健やかに新春を迎えられたこととお慶び申し上げます。長期にわたるコロナ禍や繰り返す災害によって健康を損なわれた方々には心からのお見舞いを申し上げます。

昨年の会員総会において、大阪公立大学共同出版会 (Osaka Municipal Universities Press 略称 OMUP) は、大阪公立大学出版会 (Osaka Metropolitan University Press 略称は同じOMUP) へと名称変更が認められ、特定非営利活動法人 (NPO) として堺市への定款変更、法務局への変更登記などの諸手続きが無事に終了いたしました。「共同」の2文字を抜くために必要な手続きは28種類あり、この作業には大変な労力と時間を必要としました。これを機にOMUPは公立大学法人大阪と包括連携協定を締結し、運営協議会を設置しました。これによって両者は緊密に協力して、書籍出版をとおした大阪公立大学関係者の研究・教育成果の発信を支援いたします。もちろん他大学や一般のかたの書籍出版も引き続き支援してまいります。NPOであるOMUPは、良書の出版をとおして国民の学術文化の発展に寄与することを目的としています。これから出版を考えておられる方々のご相談をお待ちいたしております。

今年は陰陽五行説十干の「癸 (みずのと)」で、干支は「卯 (う)」年ということで、「癸卯」を音読みすれば「きぼう」になるそうです。現在放映中のNHK連続テレビ小説「舞いあがれ」は、主人公「岩倉 舞」が子供の頃からの夢を実現して、飛行機のパイロットになる (私の予想) 物語です。彼女の学生時代の舞台は大阪府立大学 (テレビでは浪速大学) の堺・風車の会でした。私が現役教授時代、彼女と同様に2

年生 (生命環境科学域自然科学類) を終えて休学し、航空大学校に進学した学生が、無事にパイロットになって研究室に挨拶に来てくれたことを思い出しました。「舞いあがれ」は、昨年大学統合により発足した大阪公立大学にとって、時宜に合った宣伝になったのではないのでしょうか。

さらに、大阪公立大学発足を記念して紀伊国屋書店梅田本店にて、大阪公立大学ブックフェアが昨年9月15日から9月28日まで開催されました。前身の大阪府立大学・大阪市立大学・大阪女子大学出身の作家、藤本義一、米谷ふみ子、富岡多恵子、開高健、東野圭吾、柴崎友香、城平京、蟬川夏哉 (順不同) らの作品と共に、OMUPから刊行された大阪公立大学教員の書籍40点余りが特設コーナーで販売されました。

コロナ禍の3年間は人々の文化的な活動意欲が削がれ、OMUPからの出版も低空飛行が続いてきました。今年こそは新型コロナウイルス感染症のパンデミックが終息して、皆様には卯のように跳び、飛行機のように舞いあがる「希望」の年になることを願ってやみません。皆様がこれまで取り組んでこられた研究の成果やライフワークをぜひ書籍として残してください。今年もどうぞよろしく願い申し上げます。



自著を語る (40)



教育の<不可能性>と向き合う —優生思想・障害者解放運動・他者への欲望—

著者：森岡 次郎

A5判、上製本、170頁
2,200円（本体価格2,000円+税）
978-4-909933-33-1 C0037

「何か」ができることによって高く評価され、できないことによって低い評価を受ける。場合によっては、存在を否定されたりもする。そのような、能力主義的な人間観（社会観、世界観）には、違和感を持ち続けている。たまたま「何か」ができること・できるようになることと、その人や組織の「存在意義・価値」とは、本来的に無関係である。とくに教育の現場において、人間（子どもたち）を競争によって序列化し、ある特定の能力の有無（あるいはテストのスコア）によって格付けする思想から、どのように逃れることができるのか。それが私の主要な問題関心である。

本書では、能力や人種に基づく存在否定の極致である優生思想と、その思想に対峙した障害者解放運動における議論を中心に取り上げて論じた。出生前診断や人工妊娠中絶、ゲノム解析や遺伝子改造技術の発展は、私たちの優生学的な欲望によって駆動されている。その絶望的な現実とどのように向き合うのか。そこで、本書が仮説的に提示したのが、教育における「他者への欲望」という視座である。

優生学的な欲望にもとづく人間（人種）の改造とは異なり、教育関係においては「思い通りにならないこと」に積極的な意義を見出すことができるのではないかと。私たちは子どもたちが「思い通りにならないこと」を楽しむ心性を持っているのではないかと。〈不可能性〉が内包されていることこそが、教育の独自性といえるのではないかと。優生思想や障害者解放運動の議論を経由した上での本書の結論は、「思い通りにな

らないこと」こそが教育という営みを支えている、という逆説的な論理と倫理である。

本書は、2010年に提出した博士学位論文に加筆修正を行ったものである。10年以上も前に書かれた博士論文は、出版の機会を逸していた。というのも、本書に関連する研究は日々積み重ねられているものの、目の前のことに追われているうちに、そのすべてをフォローした上で最新の情報に書き換えることができなくなっていた。「あの情報も、この議論も加えなければならぬ」と考えているうちに、多くの時間だけが過ぎ去ってしまった。

行き場を失ったままの原稿を抱えていたとき、幸いにして、勤務している大学の研究科（大阪府立大学 人間社会システム科学研究科）から出版助成金を得ることができた。これを機に、ある種の「諦め」というべきか、「開き直り」というべきか、思い切って本書の出版を決断した。過去の自分の書いたものを久しぶりに読み返してみると、やはり不十分な点ばかりが目についたが、可能な範囲で手を加え、不要な部分は削除し、一般の読者にも読みやすいように文章を書き換え、博士論文提出以降に書いた文章を加えながら、本書は完成した。

博士論文の提出以降、個人的な研究関心は優生思想（思想史）や障害者解放運動の議論から他のテーマに変わりつつあるが、教育における競争と格付けの圧力は、より勢いを増しているように思う。人間や組織を特定の指標によって格付けする思想から距離をとり、教育という営みを通じてそのオルタナティブを提示したい、という問題関心は変わらない。出版のための作業によって、そのことにあらためて気づくことができた。これからは研究生生活は続いていくが、本書が、これまでの研究と過去の自分に一区切りをつけるものとなったように感じている。

出版に際しては、OMUPの事務および編集担当の方々には、目配りの効いた、丁寧な対応をしていただいた。重ねて謝意を表したい。（大阪公立大学 准教授）

自著を語る (41)



福祉環境デザイン原論 居住のプリューイング

著者：森 一彦

46判、並製本、208頁
2,090円（本体価格1,900円+税）
978-4-909933-36-2 C1036

本書は、私の福祉環境デザイン研究室の約23年間のアクションリサーチの取り組みをまとめたものです。大阪市立大学に赴任したのは1999年で、それは日本の介護保険制度が始まる1年前になります。その頃はまだ、認知症やケアマネ、

地域包括などの用語は、一部の人の専門用語でした。それから23年間で、福祉が一般化し、助けの必要な人々をサポートする社会的な仕組みが整ってきました。それは人口が減少する時代の転換期と重なっています。この転換期に、学生と共に新しい福祉環境デザインの開発に取り組みました。

■住むことの価値とコモンの喪失

コロナ禍の今、住むことの価値が問い直されています。居住の価値とは何か。日常の生活スタイルを問い直しが始まっています。都市は資本主義と工業化の輝かしい成果ですが、その一方で格差社会を引き起こし、人間社会の幸福感を奪っていることに、今、皆が気づき始めています。我が国の人口は、戦後（1945）の7,199万人から、2004年には12,784万人に人

口増加し、そのほとんどが都市に集中しました。住宅、学校、病院、商業施設、オフィスそして福祉施設などの膨大な数の施設が整備されました。これに呼応して教師、医師、看護師、理学療法士、弁護士、会計士、建築士など専門的職種や資格技能士が登場し、極めて高度な都市文明が生まれてきました。しかし、この都市化は、ミハエル・エンデの「時間泥棒 (1973)」の指摘のように、身近な場所から「コモン」をなくし、人と人がつながる時間を奪い、都市が本来の人間の幸せを実現する環境になっていません。ではどうすれば、良いのか。「誰一人取り残さない」環境を目指して、我々が福祉の現場で取り組んだ福祉環境デザインがその手がかりになります。

■ケアド・コモンの展開

少子高齢化の進む都市や住宅地における福祉環境デザインを通して、トイレ、デールーム、キッチン、地域レストラン、支援住宅、職住一体住居、リビングラボなど実際の作品を実現しながら、住むことの価値、すなわち幸せ、自立・自由、安全・安心、つながり、愛着、居住継続、利便性、健康を

証しました。地域の現場でアクションリサーチを進め、実際に作品になるのは3つに1つぐらいですが、研究室の卒論生、修論生、博論生あわせて延べ合計126名のゼミ生ほか多くの学生と共に取り組んだ成果だといえます。ここから多様な人がともに共生する「ケアド・コモン」の概念が生まれてきました。今日では、ケアド・コモンの考え方は一般化しつつあり、卒業生が住宅産業のさまざまな場面でリーディング役を担っています。加えて、我が国だけでなく多くの海外の研究者や学生の方々が我々の現場に見学に来られています。これは中国、韓国、台湾、オーストラリアなど東アジア周辺諸国でも同様の社会課題が顕在化しつつあり、この考え方や解決策が重要な手がかりとなっていることの明かしでもあります。

これからの25年間は激激な人口減少と超高齢化がさらに進む福祉環境の時代です。居住の価値とは何か。新しい住まい方をブリューイング（醸成）するとともに、新しいビジョンを海外に向けてアドボカシー（提唱・擁護）する時代になると考えています。
(大阪市立大学 名誉教授)

自著を語る (42)



都市経営からまちづくりを考える —まちづくりにイノベーションを起こす方法—

著者：佐藤 道彦

A5判、並製本、172頁
2,000円（本体価格1,818円+税）
978-4-909933-38-6 C0036

私は長年に渡り政令指定都市でまちづくり政策に従事してきました。そしてその経験をベースに社会人大学院でリカレント教育の一端を担っております。

私の講義受講の考え方は、聞くだけではなく自分で考え、それを発表し意見交換を経て考え方を深めるというものです。その為には、自らの目で見えて聞いた実態をもとにすることが重要だと思っております。

学生と意見交換する度に感じるのは、学生各人が様々なライフデザインを目指して非常に真剣でかつ熱心であるのですが、既成概念を元に物事を見ているということです。エビデンスに基づき事柄を客観視することができれば、世の中に出回っている感覚的な似非常識を見破れると思います。

日経新聞に学ぶことを考えるコラムがありました。その中に、映画「男はつらいよ」で、寅さんが甥から大学に行く意味を聞かれて、人生の過程で大きな問題にぶつかった時にどう対処すればいいかを筋道を立てて考える技を学ぶため、と答える場面の紹介がありました。

私は、大学の土木工学科を卒業し、自治体に入り、都市整備や都市計画に関する仕事を技術職員として行って参りました。その過程においてプロジェクトの費用便益や収益性、更に経営という視点から分析することが必要であることを痛感

し、経営学の学位を取得しました。

今回著書という形で具現化したかったのは、こうした私の経験からの反省や得た知見をベースに、まちづくりの道理と客観的な事実から筋道を立てて考えるということです。

著書では、まず、これからの人口減少社会での都市計画は、都市圏単位で構造をどう作り変えるかにあると述べました。そして大阪都市圏に焦点を当てて、鉄道ターミナル周辺に多角的な機能集積が起こった経過とその効果を考察しました。また、地方都市を対象に地方創生が行われている事例を分析するとともに非営利組織の経営論との比較を行いました。私の経験とこれらの事例を包括的に分析し、まちづくりにおける公民連携のマネジメントの要諦を整理しました。

著書の結論を一言で言うと、民主体・公支援の一体構造が必要でそのためには民組織のマネジメント手法と公のビジョンとサポートという役割が重要だということです。

ハードとソフト、実務と理論、都市計画と経営学という3つの統合が事業の実践に必要なことをこの本に込めたつもりです。

結局まとめることに3年近くの歳月を費やしましたが、これを自治体の方だけではなく、広くまちづくりに関係する方々に読んで欲しいと思っております。

著書が刊行されてAmazonなどを通して販売しておりますが、元の職場のかつての部下や他の自治体の職員の方々、国の関係者、大学関係者などから嬉しい評価をいただき、我が意を得たりの思いがあります。

これからは、この著書をより多くの方に読んで頂けるよう、また私自身新たな実践にも身を置きながら、更にまちづくり理論を深めていきたいと思っております。

(大阪公立大学 教授)

受賞作品



観光列車の経済学的研究

—地方鉄道の維持振興と地域活性化に向けて—

藤田知也氏の書籍が
日本地域経済学会奨励賞※を受賞しました。

※日本地域経済学会奨励賞

地域経済学の研究の発展に貢献し、今後の発展が大いに期待できる若手研究者を顕彰するために2012年に創設された。



観光列車の経済学的研究

—地方鉄道の維持振興と地域活性化に向けて—

著者：藤田 知也

A5判、並製本、225頁、定価3,080円（本体2,800円+税）
978-4-909933-27-0 C3065

経済学の視点から観光列車を分析し地方鉄道や地域が抱えている課題を解決することを試みた、極めて意欲的で且つ観光列車政策の在り方について示唆に富んだ著作である。

新刊書の紹介



OMUPユニヴァテクストシリーズ③ 新国際関係論

著者：井上 尚之

A5判、並製本、114頁
1,980円（本体価格1,800円+税）
978-4-909933-39-3 C3036



都市経営からまちづくりを考える —まちづくりにイノベーションを起こす方法—

著者：佐藤 道彦

A5判、並製本、172頁
2,000円（本体価格1,818円+税）
978-4-909933-38-6 C0036



道の駅の経営学

—公共性のある経営体の持続可能性をもとめて—

著者：辻 紳一

A5判、並製本、334頁
2,640円（本体価格2,400円+税）
978-4-909933-42-3 C0063



日本産チョウ類の衰亡と保護 第8集

編者：平井規央・森地重博・矢後勝也・
神保宇嗣（日本鱗翅学会）

A4判、並製本、470頁
4,400円（本体価格4,000円+税）
978-4-909933-41-6 C3045

編集後記

新年明けましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になりました。

今年は卯年、コロナと騒がれる中でも、ピョンピョンと飛び跳ねたくなるような明るい世の中になってほしいと願うばかりです。OMUPも名称変更をし、新たな1歩を踏み出しました。皆さまに少しでも弊会が身近に感じていただけるように常に進歩向上を目指していきたくと考えております。本年も何卒よろしく願いいたします。（湯井 順子）